

儀 証 十二 律 員 外

863
153



国立国会図書館 タイトル『十二律員外』 請求記号 863-153

ガラス使用

照抄の万の奇多き海く来る路をう井に硯
き海赤万の案より多の約見る文字案に
復り生れ松原障の浦名をやうくたれ
たうなる只燈立の本数阿蘇禱う山獄を丸
平見多坊新津女妻とむうえまの
芽もて憶の系初日の新多めさ
笠隠ひ語終たなし小み字信香
指の瑞離音山高良の他らん殊る隈

素久保くかこ安者総く才女のきと
交里そく坊の向ともそ志そくなり
たけし未帰乃故流未阿つ女おうけし
百ともく六せそ十二律又そえ七坊の
名あめの集と七種書たうそとゆらま
おそふあうりや亭それ西海游りの
嬢とそよあはひめそんはとそこの
地とのりか以志新原そ天保五年

甲子年...の...なり...

一肖系入

十二律員外

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を



史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を

史子...の...を



さうめんをききしはぬれを洗く

池田 長老

いさしと木権の若み子齋り

浪色 一宵

ふ性子籠て茶を汲て来る

福来

あつとつと娘のうきをく

次广 西月

坂戸氏子の文をく

イタミ 卍方

実やうに根をけ灯をく

卍 噂

肩の掛りぬきをく

十二ハ 松子

舞美あつと強持よ一生をく

ハリマ 曾受

いさしと木権の若み子齋り

十セシ 舞美

美節のふきハ雀のうきをく

卍 惜也

若鳥を鴉信よとく

卍 祖々

舞美あつと強持よ一生をく

卍 士馬

ふ性子籠て茶を汲て来る

卍 月平

鉄炮の音をく

長サキ 其映

節のあつと強持よ一生をく

葉也

内編よと料理をく

卍 南旧

いかに海自川の恐ろしくもまた

肥后 梅土

大せ川の静態をから家の抱て居る

サツマ 夏徑

鏡よりまたこ澄くしきき

日向 毛松

出くしんのみ敷吐くくく

日向 双鳥

ゆまの溜るゆまの溜る

ツツミ 及古

髪刺しと唯ふお下の結搦

ツツミ 斗火

休る座つてあつみあつみ

クレマ 雪文

雪月うとんの梅をかりあひ

小倉 木文

ちよろしくもりたる大文字

京 杜若

秋もよしく烟のいさよのいさよ

ハフキ 芳英

秋子からそ 深処をみむ

トコヤ 夙也

妻日ても精進ハ菜の香ひ

トコヤ 沙路

跡うら出来くさのうらふく

トコヤ 留后

子ハ洲柳の芽うらむら

トコヤ 踏

せしれ京坂の留む在り其門をさす

高ふことを去るうらむ

トコヤ 鳳朗

稜のまろく 幾と秋はらき

佛イカ兒

筑紫二枝庵イカ

みまよふよらて涼しき傳列イカ

史千

名歌れ集りし時をいふ者

仕馬

名を笑けし門の出入のれんをて

子

中よそめりし時をいふイカ

馬

人歌りし時をいふイカ

千

めろりし時をいふイカ

馬

孝言りし時をいふイカ

子

音子のまろくイカ

馬

付言りし時をいふイカ

千

つまはまてイカ

馬

つまはまてイカ

子

つまはまてイカ

馬

つまはまてイカ

千

言ひぬきある船

馬

さぶらひの御用ねあはれ

子

こゝろに侍

馬

ひらひらと

千

撰み仕舞ひはな

馬

種子一握てた

子

塔のわがて

子

志しぬきある

馬

まろく借りて

子

志しぬきある

馬

うらやま

子

も一月

馬

居る

千

見た

馬

尻尾

子

陽あ

馬



うへへ方々嘉祥のく

千

女房の毛もあつていさむ大 髻

馬

敷かたとやたさくあうらま

子

廁の戸をさうりくともゆき

馬

海上ヶむの海つそりとも

子

初しゆいありはほおさめし

馬

鏡極んであふき路 俎板

子

蓬窓史子輯

幾内部

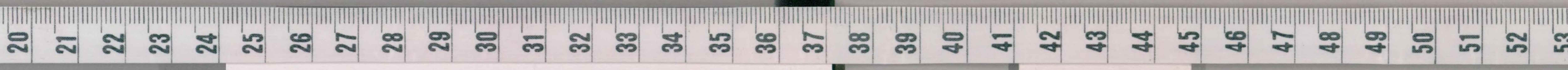
山背

我書こものさへ讀すれ子 杜蓼

我書にてもあつていさむ 菊

を付のくう使ひきりるれ子 崖

あつていさむあつていさむ 夙也



築橋も手あがりて越せぬと白此月 梅通
今立と時や偏りの道て逢ぬ 貨僕
般を廣く戸を忘るて照く 芳映
夕月雨のやまをさし 向ふ橋 若老
との辻をあゝこの方路をさし 標堂
思ふに般二般あゝ橋て枯尾を 杜響
空に宿あをる 夜より 楓 楳價
志つらむとさあるとはみえりる 大母

志つらむと一橋咲ぬと先の色 芹香
空をては通るもよをさく 月峯
出に命の巻のけのぬき 蒼乳

山外

も底平月影也て秋の海 八十男
やうらうらまきの影におほう月 也亜
むのうきも海とよハ海より 東岐

若草の露一とらり日あつき 橘枝

出

古井戸よひらりやとをの橘枝即 暮

朝や日暮あもれて啼ぬ鳥 暮

無の氣て志を持て来ぬの雲 擔

うら

舟もてあめ月夜梅の匂 来

雪のや越る侍のまひる時 梅古

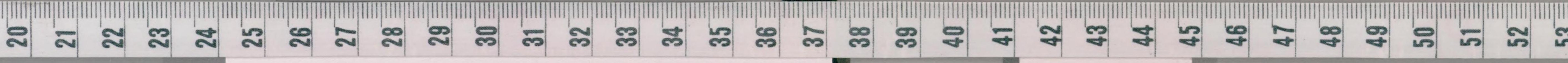
ちる花を鼻の匂と吐きり 魯秋

津國

博の時望さひたるや 稻の株 一

ちとくと火のきぬる敷きり 眉岳

手さしりておぼろした木の葉 祇白



おもしろおもしろいものゝつゝ一好望訣

廣の野乃福よかゝるるのこゝ外松年

入梅時やとふよしの信葉園燈雪

霞をいしつゝふもたのめたる清うち酔茶

新しきやとてもきたるよりの雪井眉

くさくさく側を返してとらさく松子

葉のむやみ風吹のきくき秋葉

あつとつと夕守をるの梅うち月桂

おもしろおもしろいものゝつゝ一好松隙

蓮葉のさくゝぬ残の上まうち穢兒

遠くはるか野にかりる戸のうち自樂

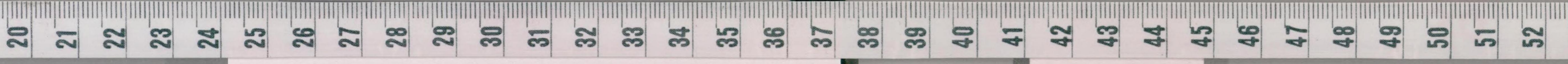
雪のふりたてま吹あけしうち文我

梅よりのつらさきり枝お終

うち候りしてゝゝある牡丹うち藝園

ぬくみ木と雪の木のあり梅のち鼎元

井眉よて鑑考選歌



涼風の来る能くしてこつ々峯 危流

檜哉と云ふはよりよきなり 五穀

松をかり松て更なり天乃川 林管

世を横よあるく休まうあやめと書 世調

舟子を浪のひきまゝにそ〜そ 其流

さて〜このまゝに候秋の山移う女 秋見

桔梗咲く戸あきとての海もきり 奇測

風をよみてゑ板伝はむとぬらうま 若乙

まふりのよまらに年回の子れ日かた 吟々

志く萩や志うて名は八雲ふの供 物方

風もよくな〜書よ合月秋の形 墨葉

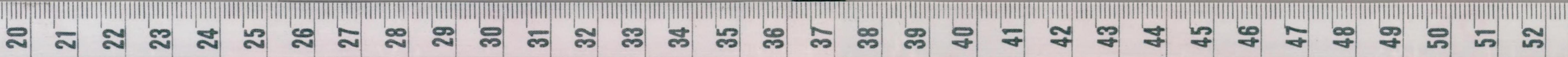
世よ秋をかたてあふまら〜と書 万雅

海の時〜情見あけの小野こつをよ 徐空

海比〜〜〜沙美を釣るし 吳老

世夢りの出る一断〜小なる外 西月

五



山陽部

針男

とらふりや一日あつて盆の舟 芳受

雲佛もやけさうり 椀のきり 椀菴

まゝて出さ川と暮れし 茶のま 茶回

ひしつやよるく 虎は美し 虎泉

ふらふら出さやもま 山の籠子 六英

小雲野へ踏くたあり 雲の家 仲く

ちのじや煙草たけむり 舞屋し 石巻城

と極々林を子たのゆすり 舞屋 ^{アカシ} 舞仲

浩字坂

是てまゝの歌の出来る 浩字坂 七尺

雲をけ 揺るやま 浩字坂 細孝

篠のぬのやろりや 浩字坂 子美

茶を運ぶに 浩字坂 舞仲

吉備の道北

ま〜帰や一のらも旅ハ〜こり仲
福光

這より見え付てあやせ葉の萌
指標

あつた回やい落葉まほり〜のき
難山

まびのるの仲

まあぬるは風呂ふ〜らや葉の雨
倭一

ま〜手た履よ〜やめ葉実
又助

まびのるの夜

ま〜もや〜あ〜〜て秋の月
岱雨

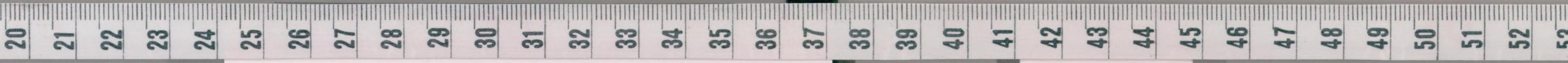
ま〜もひ〜手葉おひあり壬生念仏
席る

ま〜し〜〜これ〜ら〜ら〜り
應雅

あや

あ〜一里あ〜る樹も〜
文桂

旭〜〜るあ〜のき〜の月
こき



つる臨み 眺る 影を 入れたる うち 其古

やまを しのぎ きたる 橋く ち 風の 中 暮尾

ひらき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき 雪頂

手先より 影より 影より 梅の 花 又衣

根を ひとや 音ふる 山に おく 雲 白糸

ま 谷の しの び なる 影 海に 舟 野庵

ていせい

代垢 曾の ち 何く ち 立ち 橋の 影 風河

さ 影 一 船の 影 ち お 舟 ち 舟 西庵

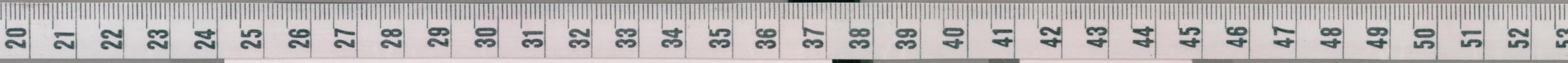
ていせい

調の 影 ち ち ち ち ち ち 暮山

白着の 影 ち ち ち ち ち ち 暮山

ち ち ち ち ち ち ち 暮山

雅石



山陰郡

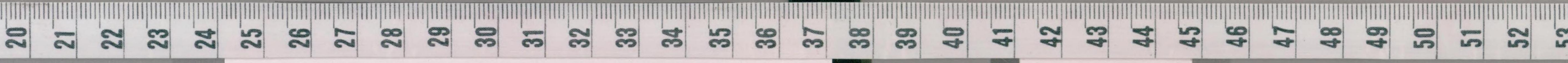
田産

陸尺のかさすもえよ相一葉	世揚
近す時根の光るや時を	勇澄
白鳥一山葵の利なき外	露光
あうらうらわゆる月夜を	蕉亭
見合して一陣お来る	徳瓜
葉れをまの井よ短きうぬ里外	曉堂

和の後(とある)川すも 鳳石

田産の遺れ好

あまのふもよあかむさる時	美葉
水煙の志もくゆる清ら外	柳紫
涼しあまたりて解き	白鳥
涼陽たや清きもゆるる	了良
一葉に結るやむのゆるゆる	お道



暮の夜も 華かゝる 烟の香 亮曠

遠く 雲の影 夕陽の光 暮傳

あけよ 花の香 春の風 秋宣

ら

夏あや 花の影 夕陽の光 水鱗

け 志ま 花の影 夕陽の光 梨雪

おこ

蝶晴く 夕陽の影 川の中 蜜枝

南海部

木函

夜あや 花の影 夕陽の光 葉管 葉管

遠く 雲の影 夕陽の光 暮傳 暮傳

あけよ 花の香 春の風 秋宣 余如

十一



阿波歌

うへ下の園植ひよりよこひも

李長

まぐさの香りさくら

方彦

まさらやうの梅舟

末吉

阿波

曙のうらみもま

露泉

門のうらみもま

久松

降ぬまのうらみも

大巻

志のみのかへりもま
まの梅のちまへりもま

山のうらみもま

大巻

果のうらみもま

繁葉

厂のうらみもま

妻人

印のうらみもま

持岳

葉のうらみもま

梅子

月子のうらみもま

三吉

思ひ初む寺へ控り ちまきさき

橘葉

まじひの夢 踏しゆく 雲雀外

一雅

降参りしやとわらふ 五月雨

西里

さき

秋のむ角をさるやまの町 祝

醍醐

雨はきて冬 唯来たるより 春の山

之是

さしあきとてふよおらせむ 梅の花

栞所

あまのや 女氣心 誠なる 猫の葉

菰推

あまの葉

秋もく火に中て 秋ある 空雁 秋

菰推

夕光よたみだたる 一葉かき

田舎

春の念入る 夢なく 春たよ外

月露

雪舞の心ひかたし 春の櫻は夢

菜人

七九

志の先乃みふ眼のけし時ありき

東支

梅柳 花の白れさるも遠ぬへし

董崖

春はみせみの花をふくれきり

一底

志の先乃みふ眼のけし時ありき

要敵

幕や障りし来る春一掃

悟流

出干や一候りりく上る履

東流

西海部

盡乃道の口

出干や一候りりく上る履

士馬

春はみせみの花をふくれきり

健堂

梅柳 花の白れさるも遠ぬへし

未映

春はみせみの花をふくれきり

九瓊

志の先乃みふ眼のけし時ありき

路丸

幕や障りし来る春一掃

幕南

十四

十三

山間や苗代村のひとら 野 大平
とらうらうらも同じをたは浮葉部 喜祇
甚あへ謗りあそむる蘇りえう子 祖心
ひらひらやあめは雲きた座のり 松之
月近くあつてはちちや 通り 雲 雨堂
世あきて息を便や せは徳堂 二蝶
風あやめのあつたきあふも送うせん 蛙所
うあさして 飛う里の東の船場外 函風

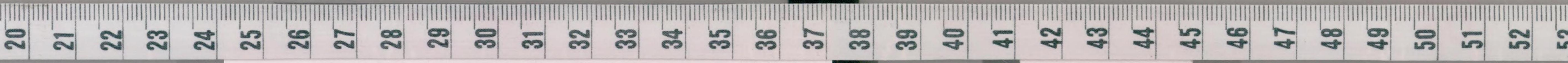
卯のちや川よ流る 溜りあふ 宇逸
池やんた跡や故きうふ一廻り 借世女
よーちやよきて料理のをやあ 斗太
白着のこまふ志れぬ十敷う子 蒲あ
菘のなつらるとあつや 津堂月 豆沙
船妻やちのあつた川 月平
あはるの海
一調子うへく風は月夜うふ 女あ

手をくわへてはるの秋
 幻化
 蚤く寝ぬのたはるのうへ
 梧井
 くらきうとく申よちる様うね
 嵐隼
 くらきうとく申よちる様うね
 采女
 海りの中をくわへてはるの秋
 木屑
 七夕も存をまの観てもあ
 象菜
 あつたあつて 紺豆袋とくはるの秋
 文老

ふき

真れ白やあつたあつてはるの秋
 木文
 毛くわへてはるの秋
 砂水
 存をまの観てもあ
 木屑
 くらきうとく申よちる様うね
 象菜
 くらきうとく申よちる様うね
 采女
 海りの中をくわへてはるの秋
 木屑
 七夕も存をまの観てもあ
 象菜
 あつたあつて 紺豆袋とくはるの秋
 文老

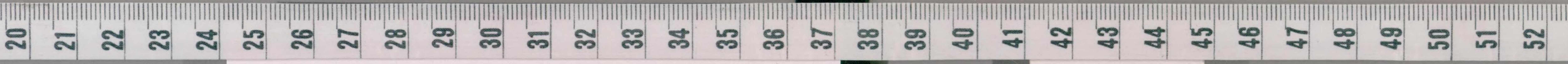
豊



之階信すれいまうらたらあけ外 台雪
雪もつれいそ目のあつて草うさ ねえ
ねえやとて葉よあつた人のあつ 雪の山
遠くも来いといふこころうま 空を
おま下草もあつておすこ外 子葉
雨の降はあつてあつてあつてあつ 舞お
あつてあつてあつてあつてあつ 舞友
あつてあつてあつてあつてあつ 其宿

灯やあつてあつてあつてあつてあつ 南田
あつてあつてあつてあつてあつ 悠々
あつてあつてあつてあつてあつ 寸長
あつてあつてあつてあつてあつ 一兮
あつてあつてあつてあつてあつ 路菰
あつてあつてあつてあつてあつ 有あ
あつてあつてあつてあつてあつ 眉山
あつてあつてあつてあつてあつ 子交

六



在室也 第一一子の火の構 常月

又得

朝暮ぬきてもう出らぬまゝ 香河

天料得

山越へり得かして来る時あり 忍籠

七十人よりぬきぬきあへし 汝川

東肥

粗糲も粗糲を忘るるまゝ 僧 高雲

かつふりと能くねるる山ハ旁 あかち

仰山よりもろや 梅折る灯の明り 舎吐

親しく此名をゆつらきり 粗道一 妻碎

くまめして見らる梅の光りうま 梅士

海をまてたまふても海月見らる 十郎

一連ハ踊りとかりを渡らる 仙翁

常也あのみまふる記 朝の光 春年

埋也やけだつまゝハ 櫻一ツ 陰河

さくら花も膳に敷きたる菘 雀 無憂人

店先へ神へさるる時雨うね 淋雪

しるしうてまよふ一山暮夜 牝月

ひむか

多岐も仕りたるやう巻の巻 双鳥

柴房り 土路の葉入るるのれ 汲古

流るるや向ふらふは 枯尾を 月夜

ゆき花や 渡さへ志つむ小板橋 寒尾

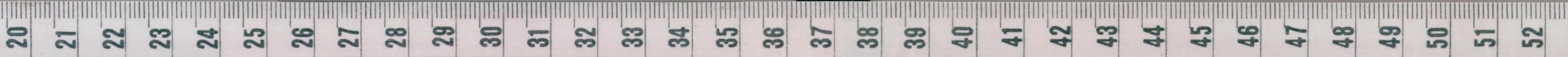
え波の山月 ぬりやうのあは 厚子巻

おの墨

葩葉のやい極みあさあたる様 流木

あしあ

續音も併に響てゆく汐の歌 毛妻



雪は戸もさうてあきうもくし 波女

夜更けや萩の吹くまの清 呂韻

春雪はたかくまはた柳のさ 由之

さつらとめるてもふさくは 阜堂

月とま寸庵庵の伽めてたる 了因

時白くや唯裸木のうあくや 巴雲

津物

鯉の糸と吉の掛うくは 雀雲

虫糸并れぬうハるこ一葉の面 其雷

夕の鳥のふとらうさめは夕橋 东指

あまののゆきとらうさめは夕橋 东指

あまののゆきとらうさめは夕橋 东指

あまののゆきとらうさめは夕橋 东指

水陸部

あやね

一糸志原を林にゆく櫛欠外 赤巻

羅の梅まうされず手の速ひきり 紫雪

常の也来れくは流めさす 大朝

志をくやうすは流す屋根の苔 葛山

見て来れくはく出くもつと 内海女

村めを捨て来れくは流す水田の雪 紫里

南城

杜のくまらち續也くまらち續 振く

灯とせいのらんうー梅の花 友圃

喰ふてくく穀といわれて昔んち 芥菜

鶴の七草を林をうれぬ店 函春

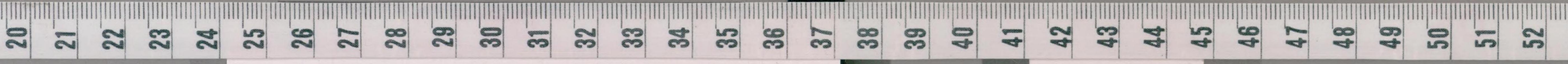


鳴るる深淵おとく乙るる子 年終
おしやうまるといふれぬ西東 水海
梅咲や志る浪るる渡るる了 年風
森を連る十日よりぬりしひ葉 立成
折るれい葉うちよえぬを棲り子 柳更
たつと今晴て痛りのやうきり 水園
おとつともぬは居るきぬおあうら 呼子
秋風入ぬやき一本又眼のとある 大常

立海るあつ一般のそ地つて又きり 森杖
大風の語るもくし一海のとある 宇牧

のや

秋よりいさうおるもものあはれ 樂海
お秋候や大儀をるむさの先 ゆき女
うらあやうらうらといふ柳の子 六候
四月を梅よけるる名よせり 晩報



中城

ふき下はなまきり 天の川

貫真

葎のきつた葎のやあるあやめうら

高嘉

ふき下はなまきり 天の川

高嘉

片瀬のちと七瀬の山よの海うら
ふきの海をたふすまきり

ふき下はなまきり 天の川

木目

旅立のやれまきりや船板きり

敬周

杉垣のうらまきりやめつら

凡太

ふきの海をたふすまきり

三香

好まきりよ膳も居るやむの宿

甘泉

ふきの海をたふすまきり

秀甫

水城

ふきの海をたふすまきり

三友

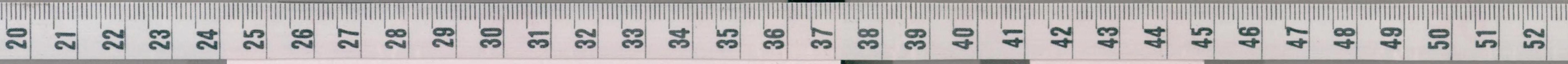
ふきの海をたふすまきり

梅里

ふきの海をたふすまきり

絶世

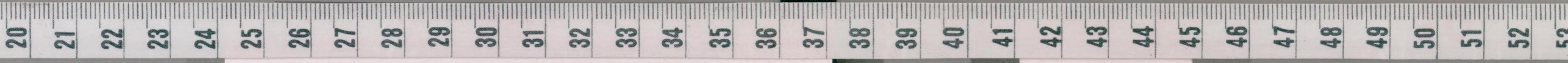
二十四



辞義のつて志を原むや 与に 里香
 厚情と手つて好音の影外 万里
 ふうらうと吹風りこぬ常葉を ろこ
 大端こころに休む踊りかま 水洋
 夜明けのやうに雲を山外 葦水
 上げ切て淋れ風りまえを 宇弘
 泣きうよひとく端れぬ雫を ちん
 日の入るやうに月原し 松左

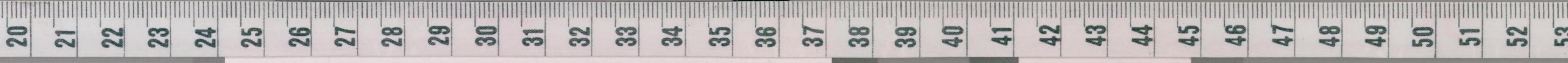
巨童
 五峴
 義珍
 横良
 美川
 桐巻
 柯守
 左米

二十五



佩持てやうと誓まきうの尺骨 迦孫
 持寺の輪にむきぬ余き外 健老
 庭薬を来うと来うと 名地 敬部
 こそよの禱されよき 勤化性 寛路
 船歌のよこみぬあの日教外 十翁
 了の子れ鼻共やうぬ 杜とろ 之徳
 流一本の付て来よきう 秋時あ 殊意
 洞野の鳴えかりしるさうの家 杜の平

常もやうとと光るぬのあえ う南
 うもひさや 撫うつぬるぬ かの雄
 きたたや 隣とるよりもあわいし 芝蘭
 枝とるいん老木とぬひらう 只如
 夕もやうとぬいひひひひひ 南十
 星もやうとぬぬけしと大根 五全
 おの母もやうと死にき一枝のむ 貞新
 常もやうとぬぬぬぬぬぬぬ 吟系



七十一

葉をて風吹散を船戸を 如巻

池月の教をよまれぬ常の那 淇翠

おんれも残るハすまゝ小田の戸 良瑤

东山歌

近津海

襟の針きてて身打ひのま 楓下

烟打て打ひのま 雲白

端清の灰をよ残る新樹外 回明

身あゝくおきて灯を消す回極外 草丈

袖のひきてありの秋 一嘯

足踏の白伊もあゝの海ら戸 薫布

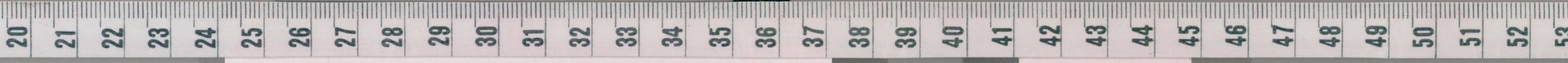
雲を散らす白此あるや坂の下 糸律

ふもをれをを騒るの吹雪うま 閑意

咲くはひらけ日影を海にお花のま
 の里も藤よりきり梅やま
 湯煙りの別よとせり亭の中
 啼かぬさきの昔を梅下うさ
 さくらんぼとてふるは語らぬ
 梅咲やまゆのみそぬ風をじ
 天の川をよろうれは又のし
 よれ花や樹山うらたねのあ光
 星谷 南岨 一旗 嵐家 蒼井 一夢 山崎

道樂

空はひよかたごよりぬれとまた
 卯の影の廣うらむおれは細
 啼てよこころの中は海をまはれ
 おつしうらむ雄雉の晴みきり
 龍川の音もくくし枯尾をさ
 藤の葉もて無由ひらけふあ葉が
 余也 梅家 之宮 然家 大藪 鳳尾



宿のみろりもあやもあやも
草野のやまもあやもあやも
あやもあやもあやもあやも
梅のまはるもあやもあやも
何雨来るもあやもあやも
提て持籠もあやもあやも
とまののせもあやもあやも
そふもあやもあやもあやも

たよめ

あやも

あやも

夕山

あやも

あやも

あやも

あやも

船の舟もあやもあやも
うきもあやもあやもあやも

うきも

あやも

松前

孫の心を解や津築の星月夜
旅の心を解や津築の星月夜
あやの心を解や津築の星月夜
あやの心を解や津築の星月夜

あやも

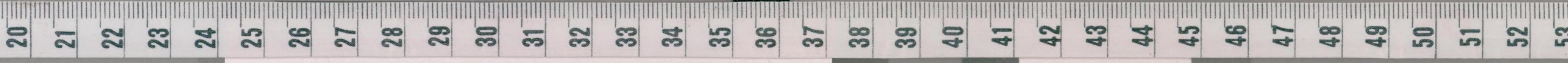
あやも

あやも

あやも

あやの心を解や津築の星月夜

あやも



涼しやあつらふとあまも来白
右橋

船酒のそと出かゝあをせうふ
右翠

るやあちやうめて出ては柳のふ
雪解

まらぬと雪のむらうて飯さうん
雪解

とこれ内の妻もゆるさす猪のふ
友之

法持仏よほさうのたおる師さうふ
二丘

飼ものふむさうふとまもあふり
又好

冬月かき〜
佳風

森阿ふたごきさまりなり言れ好
栢種

④〜畑のうらに所ある柳のふ
綿州

まごめの飯焚て居る鳥尚うふ
乙負

梅おろしと鳥釣りの房うふ
啓雪

めけて結ぶへある柳のふ
玄子

雨のふや後建龍よ柳のふ
秋窓

秋の月やおふ〜事〜とむまのふ
江

麻痺や自由よ津け〜菫のふ
又吏



東海部

うづ

雪のつらみもよる月の人
松場

五洲

秋のやみもつねに
杜蘅
雪石

おのろけのまもり
桂川

おのろけのまもり
海川

おのろけのまもり
白屋

おのろけのまもり
秋白

おのろけのまもり
菊泉

おのろけのまもり
菊泉

おのろけのまもり
省吾

おのろけのまもり
淇石

船書や障子よらるる女此書 菅江

岩あかひらきよは捨て落しきり 角海

下町の傳もきりる 生淵

昔まきのむしりたまよの世女 藤舟

藤きりのありて時雨も菴り形 桂州

ちしきたてゑしんらした横うさ 雪里

張州

うめ咲や新定代名をのてたる標 鳥津

おのゝくを淋しや熱踊り 赤外

月こぼるる時を道くはぬむし 素丁

二軒あかひをあらこち標の夢 月底

降りゆくのをて手つぐむれり 李曠

おをよさきあて居鳥飯屋の内 貴山

洗足は茶にゆてけや啼一様 見取

湯あがりたふも信一なるき雲外 連山

夕陽のついでゆるる蓮う形一 藤室

峡井

元日やの上あ一人も来る 雷石

立場うらもい一人の時あきり 芳谷

そよよの署さへもいよもいれを 蟹

さよよの骨おはら守梅れを 敬亭

烟を吸ふお読おまて冬の月 子篤

秋の夜を先つていさる雲う子 席山

灌佛もみれ佛をすいそいし 石川

さうめうしよもいもいさきう形 多々

そわれも木もたれこい咲うめのも 百意

月星の下もあまの志うらうぬ 林兵

二重もち雲袋高の十枝う子 了了

あつたものも葉はたすく心妻の介 葉夕

妻は月あけのまよふおくれもり 采丸

ふ

花盛り神も佛もあらしむ者 一瓢

大蔵也 露のたまれいづこもれす すこめ

根生え也 眠是くや蝶の飛 守中

おふくよ 秋の鳴たたり露と露 五峰

ハハハ

分るまもくく見ぬくも也 難の夢 篤嵩

佐か三

あしよ母一 朝ハとまき女良を 白崎

まおとまきいづこもる 燈る外 蓬室

朝露よの度ちとまらぬの雨 観堂

赤七れ 溜池 雨もやまらぬ 軍人

まの葉のあらしむ 梢の 枝堂

初秋也嬰小捲てり改ハるをその
心

寺をかくた捲られたる津祿

僧より一月の河惠

却りての動てハる宣頂

心槐豊

沖鱈をの赤海宗宗

たを徳てま路鳳

修香可

西月也雉咳

阿八

抱鏡子根

新斗雄

十露雪

上あは

出房りておくまいさしと後う那 涼谷

身刺

足後手う膳あし海るや梅のむ	松竹
ひらひらひらひらひらひらひら	月貨
船歌のあめれやうの笑みさう	又玉
日まのうあまのうあまのうあま	菊
薄雲さし梅のう滑るは花さ	厚巻
流るる梅のうははあまのう履	巻圃

咲く白をさききたうや百舌のむ	楽丸
年北礼うもるもらふのはまらふ	市強
氣打るやあまのうあまのうあま	又巻
流るる梅のうははあまのう履	玉巻
根鼻へまあまのうあまのうあま	天連
月入て物さうや月めあま	大瓶
灌佛やうははあまのうあまのうあま	忍花
日まのうあまのうあまのうあま	有巻



枯草のなきくおれる余きり外 奇蹟

雪

鐘中して戸をたてて雪をぬきけり 院南

風のそらちり伊ちりまて面白し 伏見

町中み飼の木とりや冬は月 菅原

東風のまじり雪やふゆのそら 雨仕

催芽のちり内へりる志きりうま 妻木

岸の動くぬまてりる茂りけり 都岐雄

をこゑして云義くきぬや膝たき 末白

七種のひらり身はよる掛ひらり 采女

もろむれあらしりむきさたり妻の風 米海

船子みほりて葉をのひらりめ如 碓氷

江湖

汗ふいて笑なきもたる角力 瀬長

ふ仕付りて高きとちあらしり葉外 春雀

菊の葉や朝日波揃ひと女の袖 草郷

門掃てお侍る寺此男う那
集風やそら杖を切るや
賞ものお這入よもてちのあ外
二里期より来て寝る日なだ標却
舟や急のちり物をとて屏を
堯皇きこいを投るや 櫻の簾
白横こ船と船より丸もきり
くみたるふのおけ御て書またり

詠海

謝堂

惟草

少之

酒一

言々

其を

若う

煤掃よ子救の入るや 猫も
松原の幕ふありや あけうは
門終りて遠きて出る子たうふ
空をたぬく回を御ま山根うふ
救れぬり一日居るや 雨 桂
さ月雨や船の粒乃むしる織る
其出ておるも波や 船のその
とま休ておられさめたり 枯尾を

柳堂

甚喜

呉亮

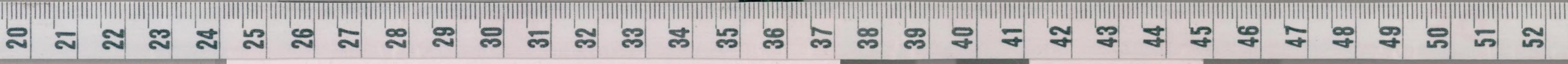
柳場

酒入

西里

若少

耕者女



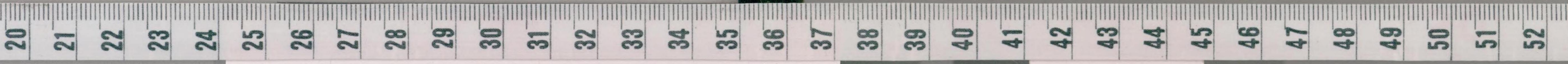
くらひきふ菴り此橋をたふせり 其分
 喰積やよくと定た 至ゆぬ 白起
 くらぬ難うせんかざりきり 壮賞
 登造作り一帯れあむり喜も却 ちぢ女
 うらみの言をうらむてうめれとふ ちぢ女
 ひき思ひひく時とつと高葉うみ ちぢ女
 子を思ふの穢れは返に寄るうみ ちぢ女
 月音やさかしてはらけ松の花 藍水

高葉して別條よふるやまれば ちぢ女
 蓬草や向ひきき海老のこ 伯丈
 新地までおきりてて妻は月 千之
 難者大喰ふ龍もよくとわら親子却 水梳
ちぢのく松宿の飯を食と船まで
根立もく船の字鼓の仲よからて
 斗つた飯の味をむく寸や船の中 其分
 炭をねる者さうりては座もぬ却 棟架
ちぢ在江戸
 ちぢの月待ちをたれすちぢうみ 肴一



梅もろ板投げかすやあつらひ
 葉とむしめふにさく横らぬ
 落しつて雨くちりする横らふ
 とけもふたぎすてわりしあふむ
 物居や庭のふれやまの葉
 争ひのておろかや初日れ出
 去つていふはあつらひも
 夢もあつらひもあつらひも
 梅海

萩の芽はる河もたを見ぬ外
 とおんれいれは子あつらひの井
 種ものもうとんもあつらひの仲
 ちりぬあつらひとかりと候やあつらひ
 門妻や初春をぬまはあつらひ
 やつらひもあつらひもあつらひ
 松もあつらひもあつらひもあつらひ
 花力持てたつらひもあつらひ



柳切て一編くまよ返れきり 風盤

望たるやまよととよに様う船 堤貝

物ころれりまの妙およめ妻の雨 月かる

岸を掃除せしむら花をさなる人 写梅

秋津もよはくま斗かへ渡り 角瓶

岸の青波うまへらつききり 草洲

をたつりやあもおすまうり争 菊頂

漱をすらとらによありし柳うね 芦窓

いとらよまのけさきり一時を 蒲蓐

近くまたりきぬるやふとらう 仙危

ぬくまよあまきりる梅やあの上 芳居

下結くまやむの道ぶのけらま 小柯

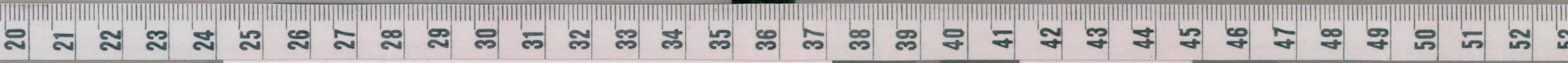
朝の字く流すの先や妻のふ 回廊

おしとらおてもんぬ様う那 盤藤

し白よまらるるまうりあんのせ 安枝

朝もまや書解のまれとらねの 女柳

五十



急指也河津のあつちさくさく
笠更

あつちさくさくさくさくさく
、

あつちさくさくさくさくさく
葉榮

あつちさくさくさくさくさく
無葉

あつちさくさくさくさくさく
白度

あつちさくさくさくさくさく
後路

あつちさくさくさくさくさく
後路

追加

去来のあつちさくさくさく
目付のあつちさくさくさく
あつちさくさくさくさくさく

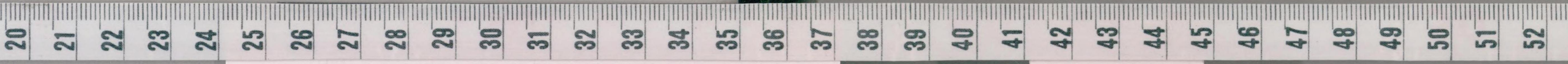
あつちさくさくさくさくさく
肥后 白鳥

あつちさくさくさくさくさく
下サ 双石

あつちさくさくさくさくさく
出羽 也難

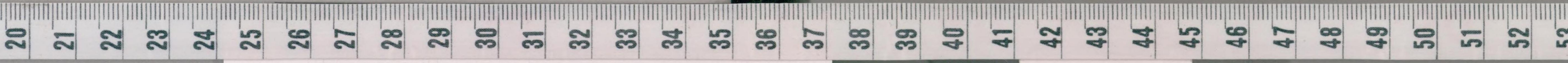
あつちさくさくさくさくさく
宇治

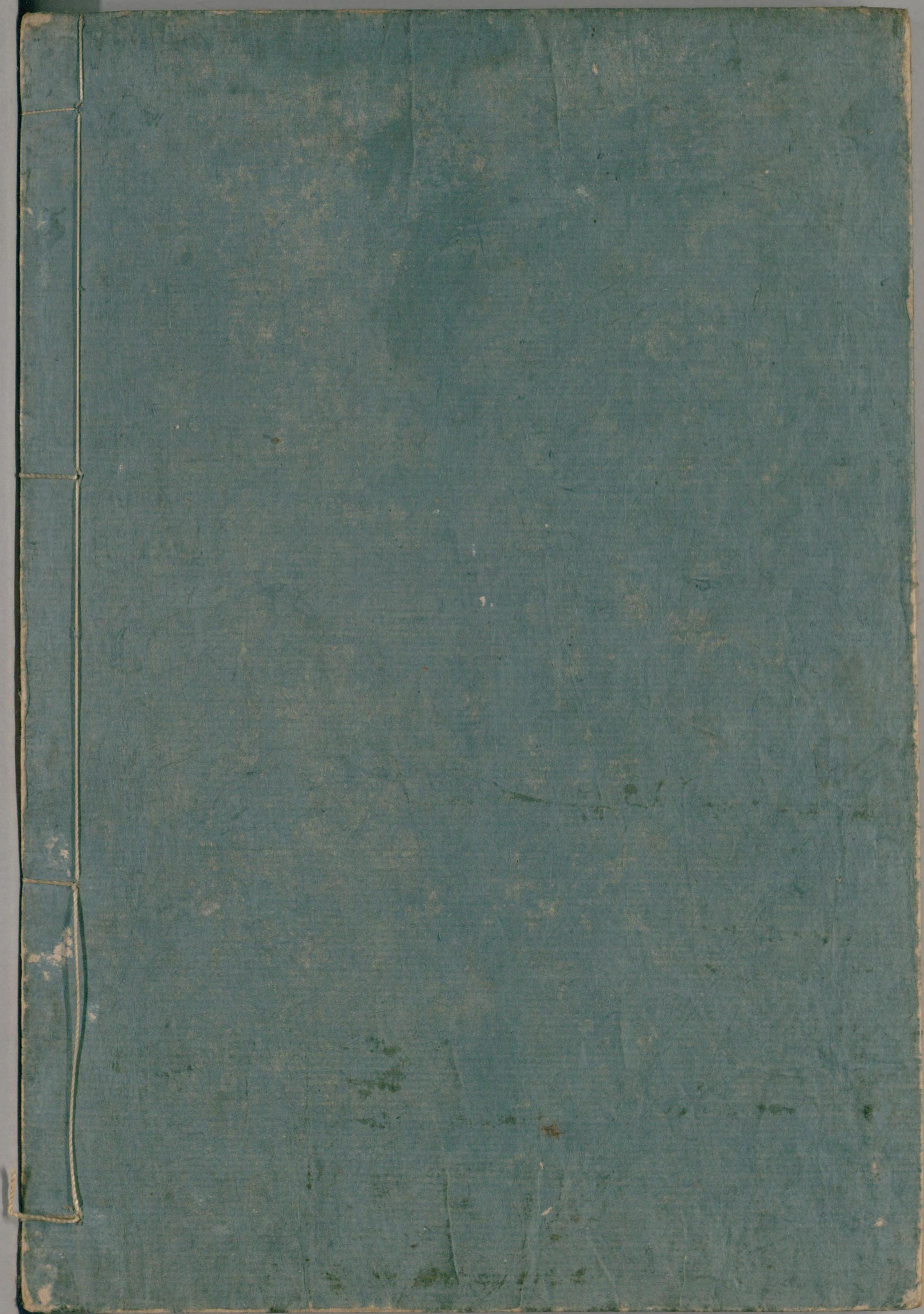
あつちさくさくさくさくさく
李



863
153

得々きつは提灯かぐす佐の事
雲舟母里 指風
 膳の壁へ来て熱立やまれば
 一飯
 鏡ひらふふらきう飯やう先
 一紙
 真風う吹とて醋や定梅子
サカ 士毫
 松植るあはき彼海をよこ記
 何と
 遠めて候や候てさく梅乃老木外
 流を
 印の猿あみそ乃甘にまきまきり
カヒ 松梅





国立国会図書館 タイトル『十二律員外』 請求記号 863-153

ガラス使用